

留学記(3)

小嶋祥三

Patricia S. Goldman (後に P. Rakic と結婚して Yale に転出し、Goldman-Rakic となる) は小柄で髪が黒く、やや褐色の肌をした美しい人だった。わたしより 6 歳年上だったと思う。技術職員の人に聞いたように記憶しているが、Pat は双子で、もう一方は生物化学をやっているとのことだった。本人に確かめたことはない。わたしが酷い英語で少しを喋ると、多くのことを理解していたので、頭の回転が速い印象を持った。東洋から若手研究者を受け入れたのはわたしが初めてだったのではないだろうか (わたしの後に少なくとも 3 人の日本人研究者を Yale で受け入れてくれた)。アレコレと気を配ってくれたものと思う。それだから、反応が早く的確だったのだろう。

ボスの Rosvold と Pat のラボの人々、技術スタッフ、秘書などの集合写真を下に載せる。前列中央が Rosvold, その右が Pat で、さらに右が Roger Brown, 右端がわたしである。Rosvold の左はわたしの奥さんである。服装から夏のようなのだが、いつどういう理由で撮影したか、確かな記憶がない。Pat が Yale へ転出することは 1979 年 2 月の初めに知らされていた。彼女が NIH を離れたのは 9 月末近くだったから、記念の写真だったのだろうか。わたしのことを述べる前に、Pat のセクションのスタッフの紹介をしておく。





ちょうどいい写真が二葉ある。こんな恰好をしたのはどういう理由か忘れてしまった。

30年以上経つので、ファーストネームあるいは姓しか覚えていない人がいるのは仕方ない。椅子に座っているのは、左が若手研究者の **Nellie Bugbee**、右は **Carter** でコザルの世話をしていた。後ろは左から右へ、**Alison** は技術スタッフ、**Linda Porrino** は若手研究者、わたし、**Linton?** は技術スタッフ、**Thelma Galkin** は技術系だが、論文の共著者になっていることが多いので、研究者から技術を評価されていると思われる。その右が **Roger Brown** で研究者、**Ellen Witt** は若手研究者でわたしが滞在中にアルコール中毒の研究で博士の学位をとっていた。

Pat が **Yale** に移った後、ボスの **Rosvold** がわたしを受け入れてくれたようだ（詳しくは知らずしなかった）。別に問題なく実験を続けていた。**Nellie** は **Pat** について **Yale** へ行った。**Thelma** はパーマネントのスタッフなのだろうか、その後 **Ungerleider** との共著論文がいくつかある。**Roger Brown** は神経化学の研究者で、**Pat** との共著論文があった。かれは **Pat** が **Yale** に転出するのを契機に研究者をやめ、**NIDA** (**National Institute of Drug Abuse**) で薬物依存の神経科学研究の評価や管理を行う地位に就いたようだった。

わたしは日本に帰った後、研究テーマを霊長類の聴覚と音声にしたので、これらの人たちや **Mishkin** のラボの人たちの研究を詳しくは知らない。京大・霊長研から慶應義塾に移り、脳の研究を再開したので、かれらの研究を多少は分るようになった。最近、知ったことだが、**Roger Brown** は2002年の6月13日にがんで亡くなっている。**NIH Record** にあ



った **Roger** の写真を貼っておく。鼻の下のひげは相変わらずで、昔の面影が残っている。薬物依存の脳画像研究などを推進したようだ。昨今の脳画像研究の進展やドーパミンと報酬の関係の研究の進歩を考えると、適切な判断だったろう。かれは多くの研究者から感謝、尊敬されていたようで、およそ1年後の2003年5月14、15日に追悼のシンポジウムが開催された。

そこには **Pat** も出席しており、その時の写真がある。中央が **NIDA** の当時の所長、右が **Pat**



である。ややお年を召された感じだが、相変わらず美しい。そして、とても残念なことだが、**Pat** はこの後2ヶ月半しか生きることができなかった。2003年の7月31日に交通事故で亡くなってしまったのだ。まだ66歳で、さらに多くの研究成果を期待できる若さだった。かえすがえすも残念で、痛ましい。

わたしは1980年に日本に帰り、研究テーマが変わってしまったが、**Pat** はわたしのことを気にかけてくれた。**Scientific American** を紹介してくれたが、わたしの力及ばず、彼女の好意に応えることができなかった。日本の神経科学学会の招きだったのか、霊長研の久保田先生の招きだったのか、**Pat** は1990年に日本で講演し、霊長研がある犬山市にもきてくれた。**Pat** は犬山の焼き物の犬山焼に興味を示した。それで思い出したのだが、アメリカカ

で Pat を我が家に招待した時に、陶器の角皿をプレゼントしてくれた。東京での写真を載せておく。左の写真は中央が久保田先生、右が Pat, 左がわたしである。お祭りの日だった。



2003 年はわたしが霊長研から慶應義塾に移った年だった。義母の介護もあり、新しい環境に適応するのに忙しかったので、Pat の不慮の死に何もしなかった。2003 年に出版した英文の本を贈ることもしなかった。これらのことを今になって悔んでいる。慶應義塾では脳機能画像を中心にした認知神経科学の研究を行っていた。このホームページの『脳と心：認知神経科学入門』はその「まとめ」のようなものである。Pat が研究した前頭前野とワーキングメモリについても、「認知的制御機能」として、自分なりの考えを持つようになった。そのようなテーマについて Pat と議論できたならよかったのにと痛切に思っている。

最後にボスの Rosvold について。かれはわたしが滞在した時は 60 歳代半ばで、もう研究はしていないようだった。アメリカ人には珍しく痩せて、物静かだった。集合写真の一部を切り出したのを載せておく。左が Rosvold, 右が Pat である。Rosvold は久保田先生が Fuster や Stamm とともに、日本に招いていたので初対面ではなかった。ラボのお茶飲み



場のようなところで昼食をとるのはわたし一人だった様な気がする。Rosvold は時折お相手をしてくれた。わたしはアメリカン・フットボールには不案内だったので、ルールを教えてもらったりした。かれはプロよりも大学のフットボールの方が好きだと言っていた。D.C.には Redskins というプロのチームがあったが、Love them, or leave town. というステッカーを貼った車を覚えている。Rosvold には論文の原稿をみてもらった。冠詞が分からないので、必要か、不要かを問うと、人差し指をはじめて不要と教えてくれた。かれは 1997 年 9 月 26 日に亡くなっている。享年 81 歳だった。

一人書き忘れた。三菱の車に乗っていた若い飼育の技術職員 Richard Duntz にはとても世話になった。かれは初の子供が生まれる時オロオロして、ほほえましかった。